



カントウータ

Cantuta

No. 35



ティワナク遺跡・太陽の門（撮影者 椿 秀洋）

- | | | |
|---|--|-------|
| 1 | ボリビアの政治・経済の近況 | 島袋 正克 |
| 2 | 不思議な縁 世界は狭い
ーボリビアと日本を繋ぐ日系人の絆ー | 小林 正博 |
| 3 | ボリビアの都市音楽「folklore」の成立 ... | 牧野 翔 |
| 4 | アンデスのマカ不思議 | 川上 裕二 |
| 5 | じゃがいもの旅の物語（連載24号） | 杉田 房子 |

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

1. ボリビアの政治・経済の近況

CADEX サンタクルス輸出投資協会理事

島袋 正克

I ボリビアの政治状況

先月2019年1月26日にボリビアで初めての大統領予備選挙が実施された。この選挙には2700万ボリビアノ(約390万USドル)の国費が投じられたが、アメリカ合衆国のように複数の政治家が立候補する大統領予備選挙とは異なり、ボリビアの大統領予備選挙では、いくつもの政党が単に大統領・副大統領をセットで各一名の候補者を立てただけで、そもそも投票以前に予備選挙の意義は失われていた。

フアン・エボ・モラレス・アイマ大統領の4度目の立候補については、その法的根拠が不明確にも拘わらず、ボリビアの憲法裁判所は「米州人権条約の政治的権利は、ボリビア憲法に定められた立候補制限よりも優先されるべきである」という与党の主張を容認した。(この国際人権条約は、1969年に署名されたコスタリカの首都に因みサンホセ協定として知られており、1978年7月18日に発効している)

今回の予備選挙に先立ち、与党のMAS党やエボ・モラレス大統領にとって大きな痛手となったのは、ボリビアがチリと争っていた「海への出口をめぐる領土問題」について、昨年10月1日のハーグ国際司法裁判所(ICJ)で「チリにはボリビアと領土問題で協議しなければならない義務はない」との明確な判断が示され、ボリビアの敗訴が決定したことである。というのも、もしこの裁判で勝訴していればモラレス大統領は一躍ヒーローとなり、その勢いに乗じて国内世論を後盾に、憲法上の問題があったにしても再立候補を確実にしていただろうからである。なぜならモラレス大統領は判決前に勝訴を予期していたかのように、“10月1日からボリビアとチリのための新しい歴史が始まります。裁判の判決は遵

守しなければなりません。チリとの新しい外交関係を構築しましょう。なぜなら我々は隣国であり、生涯付き合わなければならない兄弟だからです。この問題を保留にすることはならないのです“という内容の演説を行っていた。

ところがモラレス大統領の期待に反してハーグ国際司法裁判所の判決は“1904年の平和と友好条約でボリビアとチリの領土問題は解決済み”という裁定を下してボリビアの敗訴が決定した。その結果、モラレス大統領の「海を取り戻し、裁判勝訴を機に再立候補を決める」という政治的シナリオは崩れてしまった。因みに去る1月の大統領予備選挙は、昨年12月のハーグ国際司法裁判所の判決が期待と異なる結果となったことから、大統領が劣勢の挽回を狙って、予備選挙の勝利を立候補の正当性に繋げようとして強行した可能性もある。



写真1-1 ボリビア大統領4選をめぐる国民投票



写真1-2 海への出口問題裁定後にハーグ国際司法裁判所を後にするチリのピネラ大統領(右)

今後のボリビアの大統領選の行方は予断を許さない。即ちエボ・モラレス大統領の立候補は可能か、野党が統一候補を出せるのかが焦点になるが、野党候補については与党のモラレス大統領に続いて国民の支持率の高いカルロス・メサ元大統領が昨年FRI（左派革命前衛党：Frente Revolucionario de Izquierda）から予備選挙立候補したことはボリビア国内では意外と受取られた。その理由は、この政党はマンフレット元コチャバンバ州知事が設立し、党首であった政党だが、党首が亡命していることもあり近年では勢いもない。支持率2位のカルロス・メサ氏がなぜ同党からの出馬を決めたのかその理由は不明であるが、支持基盤政党を持たないカルロス・メサ氏にとって、翌本年1月の予備選挙が念頭にあり、焦りがあった可能性もある。

異色の組み合わせとしては元サンタクルス市長のジョニー・フェルナンデス氏がサンチェス・デ・ロサーダ政権時の副大統領であり、先住民系政治家のビクトル・ウーゴ・カルデナス氏に接近していることだろう。



写真1-3 ベネズエラのマドゥロ大統領と会見するボリビアのエボ・モラレス大統領

残念ながら、ボリビア大統領選挙はエボ大統領にとってネガティブな面が多く、これから大きく揺れることが予想される。その理由は、長期政権による汚職と、これまでの経済政策が生んだ歪みであり、与党MAS党に政治責任がないと言い切れない。

い。またブラジルがボアソナロ大統領という極右政権になるなど、ボリビアの隣国の殆どが保守系の指導者に替わっており、さらにボリビアと結びつきが深いベネズエラが、経済だけでなく政治的にも破綻するとボリビアの政治経済情勢も一気に変わる可能性もある。

II ボリビアの経済状況

昨年8月6日の独立記念日の演説でモラレス大統領は「今年のボーナスはダブル支給がほぼ確定している」と発言し、さらに10月には「法令第1802条によりPIB(GDP国内総生産)が4.5%以上成長した場合、国家公務員や国営企業・民間企業へも法令通り200%のボーナス支給を義務付けている。INE（国家統計局）の統計で我国の今年のPIB(GDP)は4.5%を超えており、今年のボーナスはダブル支給が確定した」として法令通り200%支給を発令した。

国内の企業経営者はその発令に猛反発し、商工会議所を中心に経営者はINEが算出した成長率の基準や裏付けを求めたが、それが提出されることはなかった。

このダブル・ボーナスは、企業にとって予算的にも厳しい支出であったが、さらに縫製業や飲食店など中小事業者にとっては心理的な影響が強く、人員解雇などの反動を生んでいる。また懸念材料としては、バブル気味だった建築・不動産ビジネスにも陰りが出ており、セメントなど建築資材価格の下落も広がっている。

為替レートについては、1USドル6.96ボリビアーノス(Bs)の公定レートが今だに続いているが、1USドルをBs. 7.035~7.04で両替する裏レートもあり、わずかながらも現地通貨安になりつつある。

近年のボリビアでは、USドル安を利用して、隣国から密輸入される商品が多々あり、昨年10月に視察

したオルロ県には毎月約580台のトラックがチリ国境を越えて到着するが、正式な輸入は約200台程度で、残りの約380台のトラックは密輸入の品を運んで来るとトラック業者は語っていた。そして運ばれてくるのは主にEncajonado（箱物）と呼ばれるカートン箱に入った商品（家電、家具、その他）や輸入禁止になった中古車（車歴1年未満は輸入可）やその部品である。

チリの港との国境を接するオルロ県は中国製品などアジアからの密輸品が多いが、ブラジルと国境を接するサンタクルス県やベニー県、パンド県、そしてアルゼンチンと国境を接するタリハ県には、小麦粉や砂糖などの日常食品が多く密輸されており、現地通貨高・ドル安は輸出業者だけでなく、それと競合関係にある日系移住地を含むボリビアの農牧業や製造業も圧迫している。

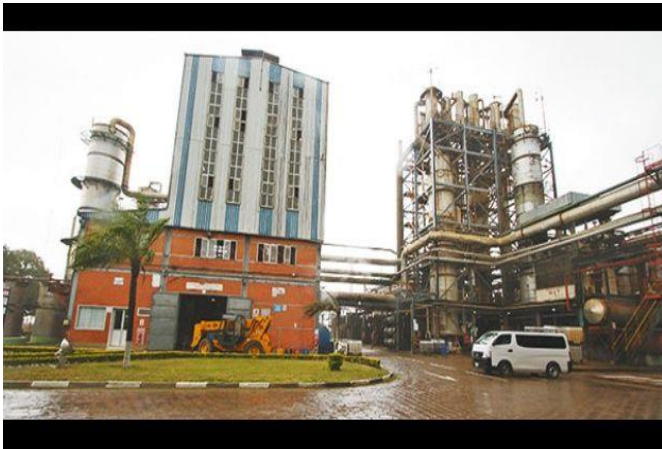


写真1-4 ボリビアの民間製糖工場とエタノールプラント

今年の2月に解禁されたエタノール燃料では、生産者と買取側の政府の窓口である石油公社（YPFB）との価格交渉が難航していた。政府は当初、生産者に対し買取価格72セント/ℓを提示したが、その後政府は54セント/ℓに価格を下げ交渉は暗礁に乗り上げていた。しかし昨年末からエタノール燃料は給油所を限定して販売が開始された。

エタノール燃料の発売の遅れで、ボリビアの製糖工場内の貯蔵タンクはエタノール・アルコールで満

杯の状態となっていたが、限定的とはいえ発売が可能となり、サトウキビ生産業界にとっては朗報となっている。また、大豆の不作や隣国からの砂糖の密輸入などで、この2-3年窮地にあった農業は政府のエタノール政策の将来を見込んで大豆からサトウキビへの転作する農家が増えている。しかしながらこの転作には二つの問題がある。

1. 政府（YPFB）によるエタノールの買取数量及び価格の遵守
2. 製糖工場の生産キャパシティ

政府のエタノール燃料の解禁はガソリン・ディーゼル燃料への補助金20億ドル/年を軽減するためのものだが、果たして政府が約束を守れるか、さらにラテンアメリカの陋習である汚職にまみれるのではないかという懸念もある。そして増産キャパに関しては既存製糖工場の増産余力は15%程度だと言われており、さらなる設備投資が行われなければ、サトウキビの植え付け面積が製糖工場の生産キャパを上回りサトウキビが畑に放置されるという可能性もある。エタノール燃料の課題は、政府の買取の価格と数量の確約・実行、そして製糖工場の増産のための設備投資である。



写真1-5 ボリビア石油公社の天然ガスプラント

ボリビアの外貨準備高は2014年12月をピークに大きく下がり、2018年9月までの3年半の間に、151億2,500万ドルから87億2,900万ドルと42.3%も減

少した。その原因として下記の5つがあげられる。

1. 国際天然ガス価格の下落による輸出収入の減少。
2. 為替レートของボリビアーノ高・USドル安の固定継続。
3. 対外債務の増加。
4. YPFB など国営企業への融資増加。
5. 貿易収支の輸入超過。

ボリビアの輸出収入の40%以上を占める天然ガスはまさに経済の大動脈であり、その血流が少なることは経済が貧血状態に陥ることを意味する。それに関連して来年度のボリビア・ブラジル間の天然ガス交渉はボリビアにとって大きな試練だと言っても過言ではない。

為替レートについては前述の通り、アルゼンチンやブラジルなどの隣国と比較すればボリビアーノ高・USドル安という固定相場が継続されたままである。対外債務の特徴は中国からのファイナンスの増加である。2011年と比較すると同国からのファイナンスは358%増加しており、エボ・モラレス政権となった2006年と比較すると何と1,910%も増加している。

昨年8月のボリビアの対外債務は98億1470万ドルで、2018年に3億8670万ドル増加した。2006年までのボリビアの対外債務は32億6300万ドルで、対外債務は当時と比較すると300%以上増えたことになる。

国際金融機関を除く、対外二国間債務の主要相手国は中国であり、ボリビア中央銀行（BCB）の報告書によると、下記のとおり2018年8月現在の債務残高は7億8470万ドルに増加しており、二国間債務の10億7970万ドルの72.6%に相当する。

1. 米州開発銀行（IDB） 27 億 6100 万ドル。
2. 中南米開発銀行（CAF） 23 億 8800 万ド

ル。

3. 世界銀行（WB）、8 億 3200 万ドル。
4. 中国 7 億 8470 万ドル

2006年までの対中国との二国間債務は、3900万ドルで、ブラジル（1億3300万ドル）、スペイン（1億2900万ドル）およびドイツ（4600万ドル）との二国間債務に次ぐものであった。

国営企業への政府融資額は2018年3月時点で341億4400万ボリビアーノス（50億ドル）と地域開発のための国民資金（FNDR）17億6400万ボリビアーノス（2億8000万ドル）の合計融資額は52億8000万ドルになった。国営企業への融資についてFundación Milenio（ミレニアム財団）の経済学者は首都ラパスのロープウェー（テレフェリコ）や、コチャバンバ県のブロプロ肥料工場など赤字経営の公営事業への投融資と外貨準備高の減少は相関しており、会計監査も行われない安易な国営企業への融資は慎むべきだと警告している。

貿易収支については、輸入超過が続き2015年から2018年8月までに、33億2600万ドルの貿易赤字をもたらしている。今後、経済に関しては、上記のブラジル大統領選挙後に行われるだろうと思われる天然ガス交渉への注意が最も重要である。また、ハーグ国際司法裁判での敗訴によりボリビア国内で高まっている太平洋側への海への出口となるペルーのイロ港へのシフト、サンタクルス州東南端のブラジルとの国境に位置しパラグアイ川に面するブエルト・ブッシュでの河川港湾開発計画、さらにこの両計画を結びボリビアを東西に横断する大国際鉄道計画などへの国内・国際的関心が高まりつつあることはボリビアの国家経済開発にとって朗報だと思われる。

（終わり）

2. 不思議な縁 世界は狭いーボリビアと日本を結ぶ日系人の絆ー

一般社団法人 JBN・全国工務店協会
事務局長
小林 正博

今から6年前の春、JICAを早期退職し神奈川県中部の金属屋根メーカー元旦ビューティ工業㈱に就職して間もない休日、娘夫婦のバーベキュー・パーティーに出かけた。そこで出会ったのが知花賢伸と賢正というボリビアの日本人移住地コロニア・オキナワ生まれの兄弟である。

兄の賢伸氏はボリビア東部の同国第2の都市サンタクルス市にあるガブリエル・レネ・モレノ自治大学卒の獣医、弟の賢正氏は歯科医だが、80年代末のハイパーインフレの後に来日し、二人で修業を重ね、力を合わせて神奈川県西部に住宅の金属屋根を施工する「(有)K&K 板金工業」(以下 K&K という)という会社を立ち上げていた。他方、私が働く元旦ビューティ工業は、公共施設など大型物件が中心、一方のK&Kは住宅が中心なので、両社は協力も競合もしていなかったが、たまたま、私の義理の息子がK&K 知花兄弟の下で働く屋根職人だったという縁である。

そして、やはりバーベキューに参加していた賢正夫人は、私の79年のブラジル初出張以来、その後のJICAブラジル事務所時代にも何度となく通ったアマゾンのトメアス移住地生まれで、期せずして懐かしい思い出話となった。また、知花家の長女、つまり二人の兄弟の姉は看護師で、JICA中南米部時代に訪ねたコロニア・オキナワ診療所長の玉城静雄先生夫人であることも分かり、「世界は狭い、悪いことは出来ない」とあらためて感じた春の休日であった。

祖国ボリビアへの思い

知花兄弟の第二の祖国ボリビアへの思いは強く、日本で学んだ知識・技術をいつかボリビアの役に

立てたい、日本の優れた製品を提供してボリビアの人々の生活を良くしたいと常々考えていることが判った。そのような思いを後押しするため、中小企業海外展開支援の一環として折からJICAが募集していた「中南米日系社会との連携調査団」への参加を薦めたところ、知花賢伸氏とK&Kに金属屋根「マックス瓦」を供給し、緊密に連携するマックス建材(株)の榎本浩康代表が、それぞれ第3回と第4回の調査団に参加した。



写真3-1 サンタクルス市会議長訪問

これによってK&Kとマックス建材には、中南米日系社会とのネットワークとともに中南米に関心を持つ日本国内の中小企業経営者とのネットワークも生まれたわけである。その後JICAの日系青年研修制度により、サンタクルスから日系人の若者二人を10ヵ月にわたりK&K及びマックス建材とその協力会社で受入れ、屋根の施工や板金について技術習得を図った。そのうちの一人が玉城雄一君で、玉城先生の長男であり、また知花兄弟の甥でもあった。日本語より英語が得意な雄一君を懸命に支えたのがハワイ大学を出てマックス建材社員となっていた榎本瑞生さん、榎本代表の姪である。その三年後、二人は結婚し、現在はサンタクルスに住んでいる。人と人の縁と出会いの妙味である。

ボリビアに進出する中小企業のための基礎調査

アジアなどに比べると、中南米に出ようとする日本の中小企業はまだ少ない。そこで、マックス建材が中心となって JICA の中小企業海外展開支援のための「基礎調査」に応募し、幸運にも採用された。元旦ビューティ工業も私の入社後間もなく、近い将来にベトナムへ海外展開することを想定して JICA の同種の調査に応募して、私自身がプロジェクトマネージャーとして同調査を進める経験をしていた。そのようなこともあり、知花、榎本両氏からの依頼を受けて両社間のコンサルタント契約により、ボリビアを対象とする基礎調査に参加することとなった。「ボリビア多民族国での金属屋根を利用した居住環境向上、及び住宅産業育成に関する基礎調査」のスタートである。そのお陰で、2017 年の 11 月と翌 18 年の 4 月に短期間ながらボリビアを訪れる機会を得た。事前準備の一つは、共に、かのチェ・ゲバラも登場し、沖縄ウチナーンチュ女性のマブイ（魂）と肉体の遍歴を描いた冒険反戦小説、池上永一著「ヒストリア」を読むことであり、オダギリジョー主演の映画「エルネスト」を観ること、そんな時期でもあった。

ボリビアの人が買える屋根

ボリビアを含む中南米地域では、このところ年平均 5 % の高い経済成長と所得の増大とともに「暮らしの質の向上」へのニーズが高まっている。エボ・モラレス政権が 2013 年 1 月に打ち出した独立 200 周年に向けた国家発展計画「祖国ボリビア・アジェンダ 2025」によると、2015～2020 年に新たに 11 万 5,000 棟の住宅に投資することが政治公約されるなど「住宅問題への積極的な取り組み」が謳われている。そのようなボリビアだが、屋根をはじめとする住宅市場はまだ十分には育っておらず、在来の住宅工法では多様なニーズに応えられないため、貧富の差が居住環境の格差に顕著に現れている。たとえば、低所得層では家の壁・屋根に砂・粘土・藁などで作った重い煉瓦や日干し

瓦を使用し、中所得層では壁にセメントを用いつつあるが、屋根は依然として耐久性に劣る日干し瓦も多く、ひび割れによる雨漏りや落下の危険など、現状では、居住環境の快適さや安心・安全が確保されているとは言い難い。そのため我々の基礎調査では、ボリビアの居住環境の改善と質の向上への一つの手段として、軽量で耐久性のある金属屋根のマックス瓦をボリビアに導入し、その工場を建設するとともに生産・施工技術者を育成し、雇用の創出にも貢献することを目標として掲げた。



写真 3-2 レネモレノ大学建築学部長へマックス瓦をプレゼン



写真 3-3 サンタクルス市の一般的コロニアル瓦屋根

知花兄弟の母親が住むサンタクルス県の中心都市サンタクルス・デ・ラ・シェラは一年を通して温暖な気候だが、時々南極方向からのスール(SUR)と呼ばれる強い南風が吹いて気温が急激に下がり、

突風となることがある。そのため、サンタクルスの建築に求められる大切な設計条件は、突風・強風に対する耐風圧強度であるとされているが、金属屋根は強風にめっぽう強いことが特徴だ。一方、サンタクルス市及び周辺地域における住宅価格は、規模や品質により様々であるが、低価格帯の平均的な土地付き住宅価格は、平均床面積が150~200㎡程度で、平均価格は7~8万米ドル程度となっている。つまり、この価格帯で屋根のコストを一定の範囲内に収めることが最大の難題であるが、現地のごく普通の市民が買えるこの価格帯で金属屋根を導入すれば解決策になる。そのためには、サンタクルスでの現地生産体制を整えると共に、材料のガルバリウム鋼板を出来るだけ安価に入手することが当面の課題である。引き続き、知花氏や榎本氏など関係者が協力し合って、原材料の調達と製造のコストを下げる懸命の努力が現在続いている。

故郷に錦は飾れるか

ボリビアの住宅屋根の種類としては、①コロンIAL瓦(窯製陶器のスペイン瓦)屋根 ②スレート瓦屋根 ③トタン屋根 ④陸屋根(セメント等によるスラブ屋根)の4種類が大半を占めているが、サンタクルスにおける住宅屋根について、コロンIAL瓦が約7割、その他が3割程度であり、前者が安定した人気を誇っている。そのため、新製品である金属屋根のマックス瓦についてもコロンIAL瓦をイメージしたオレンジ色の製品を試作し、市場の要求に応えようとしている。他方で首都ラパスは、コロンIAL瓦よりトタン屋根が多くみられ、名物の「テレフェリコ」と呼ばれるロープウェイからの眺めは、町全体が錆びたトタン屋根のために周囲のラテライト(紅土)と相まって赤茶けた印象に映る。もともと金属のトタン屋根は、陶器瓦であるコロンIAL瓦よりも対候性・耐久性が高く、錆にも強い金属屋根に置き換わり易いと言える。その点では、サンタクルスよりラパスの

方が市場としては有望であろう。ただ、知花兄弟が故郷に錦を飾る、いや、故郷に尽くすという意味からも、金属屋根製造工場はサンタクルスに建設し、そこを拠点とすることを我々は目指している。ラパスは将来的にはポテンシャルの高い市場だが、まずは知花兄弟にとってラパスよりも人の絆も空気も濃いサンタクルスで、力いっぱい金属屋根の製造・販売・施工に取り組んでいこうとこつこつと準備に努めているところだ。

私自身は、2回の現地調査に基づいた報告書をJICAに提出したあと、元旦ビューティ工業から街の大工さんの協会に転職した。このため、現在は知花兄弟や榎本代表と一緒に活動はできていないが、これからもこの素晴らしい友人達のために、出来る限りのお手伝いを続けて行きたいと思うこの頃である。(終わり)



写真3-4 錆びたトタン屋根の多い首都ラパスの風景

3. ボリビア都市音楽

「folklore」の成立

民族音楽学研究者

(東京芸術大学博士課程)

牧野 翔

「ボリビアの都市音楽の演奏・研究をしています」と言うと、「アンデス古来の音楽なんですよ?」「インカ帝国の音楽ですか」と反応されることが多

い。しかし、実は、日本で「フォルクローレ」¹と呼ばれるボリビアの都市音楽は、20世紀にボリビアの都市と農村の文化が混ざり合い、国内外での評価を元に成熟してきた音楽である。

20世紀初頭に「インディヘニスモ」と呼ばれる、先住民族の擁護と文化的・社会的復権を求める社会運動がボリビアにも波及した。音楽においてもそれは例外ではなく、現地生まれのスペイン人クリオーリョの音楽家たちは、スペインやアルゼンチンで音楽を学んだのち、農村での採譜を基に「ボリビア国民旋律Aires nacionales」を創作したのだった。中にはロシアの国民楽派を参考に、五人組を名乗る作曲家たちも現れたが、当時の国民楽派は農村音楽の旋律をモチーフとするものの、実際のインディヘナ音楽の実践には踏み込まないロマン主義的なものであり、演奏楽器もピアノやギター、フルートなど西洋楽器に限られていた。（写真3-1参照）



写真3-1 20世紀初頭の都市音楽アンサンブル

また、1949年までボリビアにはレコード会社はなかったため、1930年代から1940年代にかけて、ボリビアの音楽家はブエノスアイレスでレコードの録音を積極的に行った²。

¹ ここでは、広義の「ボリビア固有の文化」ではなく、狭義の「ボリビアの都市音楽」として用いる。

² 日本で最初のレコード会社「日本コロムビア」は、1910年設立。アルゼンチンではRCAビクターが1929年設立

しかし、1952年～64年の「ボリビア革命」がボリビア音楽の流れを大きく変えた。インディヘナとクリオーリョの混血であるメスティソを「あるべき国民像」に据えた革命政権は、農村の楽団の都市への招聘や、ラジオで一定時間のボリビア音楽の放送の義務付けを行った。この潮流に乗ったのが、世界的ボレロバンド「トリオ・ロス・パンチョス」（写真3-2参照）に1年間参加したボリビア人歌手ラウル＝ショー・モレノであった。



写真3-2 トリオ・ロス・パンチョス（左がモレノ・1951年）

モレノは、ボリビアに帰国すると同様のボレロ・トリオを結成し、当時のクリオーリョや中上流階級メスティソの心を捉えるのに成功した。ロス・パンチョスが、メキシコの民衆音楽コリドなどを演目に加えたのと同時期に、ボリビア民衆音楽³と、都市部で忌避されていた民族楽器チャランゴを、ボレロトリオへ導入すると、多くの演奏家がこれに追随した。このころからフォルクローレという言葉が用いられるようになった。

1950年代よりアンデス音楽が流行していたパリから、1966年チリを経由して1人のスイス人ケーナ

³ 例として、クエカ、バイレシート、ワイニョ、タキラリ等が挙げられる。

奏者ファブレが、ボリビアへと辿りついた。1940年代にアルゼンチンで生まれ、民族楽器を中心とした4〜5人の少人数編成によるボリビア音楽の演奏様式を、パリへと持ち込んだのは、1956年ごろにアルゼンチンやペルーからの美術留学生だった。当時のパリでは、タンゴやサンバ、マンボなどのラテン音楽が一世を風靡しており、ボリビアやペルー、アルゼンチンの音楽は、次の商材としてレコード会社の注目を浴びた。



写真3-3 ロス・ハイラス (1967年)

ファブレがボリビア人と共に結成した「ロス・ハイラス」(写真3-3)は、上述の少人数演奏様式という現代まで続くフォルクローレの基本様式をボリビアに定着させた。また先進国からやってきたファブレが、パリで学んだ民族楽器ケーナを演奏する姿は、ボリビア人に衝撃を与えたという⁴。そして1969年、国内で成功を収めたロス・ハイラスは、欧州へのツアーへ出発し、「アンデスの本場」であるボリビア出身という強いブランド力と、欧州市場を意識して鍛えた演奏力で成功を収めた。そして、その様子はボリビアでも報道され、ボリビア都市住民のもつインディヘナ性への忌避感を和らげた。

このように、欧州市場で支持されたインディヘナ

⁴ ディキシーランド・ジャズのクラリネット演奏経験を活かしたファブレの奏法は、インディヘナのケーナ奏法と真逆の、タンギングとビブラートを駆使したものであった。この奏法はその後、ボリビアのケーナ奏法の基礎となった。

性を取り込む一方で、1970年代から1980年代にかけて、フォルクローレ音楽家たちは、西洋古典音楽のレパートリー化、民族楽器の調律精度の向上⁵、超絶技巧の開発、楽曲の複雑化など、ボリビアの都市部での受容のために工夫を凝らした。重要な例としては、エレキギターやドラムセット、エレキベースを導入したバンド「ワラ」が挙げられる。彼らは、1970年代に流行したハードロックとサイケデリック・ロックをベースに、農村由来の新しい音楽を創作した。また、従来のコード進行や形式にとらわれない自由な作曲により世界市場に進出した「ロス・カルカス」(写真4)が登場すると、市場はボリビア国内、北米、そして日本にまで広がった。

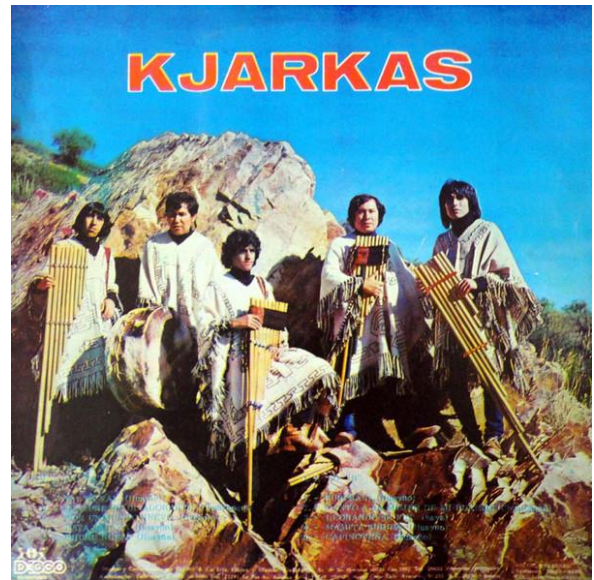


写真3-4 ロス・カルカス (1982年)

つづく1990年代には、シンセサイザーと16ビートを用いた「カラ・マルカ」、商業主義音楽への反動として「ロス・ハイラス」前の都市音楽の復興を目指す「ムシカ・デ・マエストロス」(写真3-5)などが現れた。

⁵ 2018年に逝去された「アンデスの家 ボリビア」の店主、福岡稔氏が持ち込んだ楽器チューナーが貢献したとされている。



写真3-5 ムシカ・エル・マエストロス (2015年)

このように20世紀、とりわけ1950年代より、都市出身（および都市へ移住した農村出身）の音楽家たちは、フォルクローレを作り上げた。彼らは、国際市場やクリオーリョからの反応を伺いつつ、併せてボリビアの人口の半数以上を占めるインディヘナの要素を、どのようにバランスさせるかについて常に試行錯誤する必要があった。そして2006年以降、エボ・モラレス政権になって音楽を取り巻く事情も変わった。半世紀前にボリビア都市部では眉をひそめられていた民族楽器チャランゴが、文化遺産に制定されるなど、ボリビアにおける天然の鉱物資源と同様に、フォルクローレは守られ、活用されるべきものとなったのだ。

文化保護政策の功罪に関する民族音楽学の研究は枚挙にいとまがない。ボリビアの事例を冷静に観察すると共に、演奏家として主体的な活動も続けていきたい。折しもボリビアへの日本人移民120周年に当たる本年2019年には、多種多様なフォルクローレ音楽家がボリビアから来日する。3月末にはチャランゴの巨匠「アルフレド・コカ」、5月の連休にはお台場でのボリビアからのゲストも迎えたパレード、同じく5月に上述の「ロス・カルカス」。また、11月には上述の「ワラ」のメンバーであり「ム

シカ・デ・マエストロス」の創設者であるケーナの第1人者「ロランド・エンシーナス」の来演が予定されている。ぜひ20世紀のフォルクローレを作り上げ、今も第一線で活躍するボリビア音楽家たちの熱い演奏を、ライブのステージで感じていただけたらと思う。（終わり）

4. アンデスのマカ不思議

マカ栽培家
川上 裕二

はじめに

南米アンデス地方で“アンデス薬草の女王”と呼ばれる植物がある。ご存じの方も多いと思うが、植物名をマカ（学名 *Lepidium meyenii* Walp）といい、アブラナ科の多年生植物で、根には大量の必須アミノ酸やカルシウム、鉄、亜鉛などを含み、日本でもさまざまな健康サプリ商品の原料として利用されている。その効果効能の範囲も、当初は精力剤、その後は妊活、最近では血流改善、美肌効果等へと拡大し、ペルー産マカとしてのブランドを確立している。ちなみにアンデスに面したボリビアでもマカは栽培されているが、こちらは栽培地域の住民以外には殆ど知られておらず、ペルー産の影に隠れた状況となっている。たぶん、ペルー産と一緒に粉末として国外にも輸出されていると思われるが詳

しいことは分らない。

私自身とマカとの関わりは、ある時たまたま知人が日本国内でマカ栽培を始めたのを耳にしたことに始まる。農学の専門家だった知人はマカのことを化け物のような植物だと表現し、認知症や鬱（うつ）、花粉症、糖尿病、アトピーなどにも効果がありそうだと教えられた。それをきっかけに私自身も健康ハーブとしてマカの効果効能やその可能性に興味を持つようになり、それならと一念発起して、知人の教えを支援にマカ栽培にチャレンジすることにした。それから3年、自身の栽培経験からマカの植生や今後の利用の可能性について、少しは知見も得られたと思うので、そのいくつか紹介させて頂けたらと思う。

植物としてのマカ

まずはマカの実物の写真をご覧頂きたい。カブに少し似ているが上の葉っぱが細く、下の塊茎部は少し横に広がっている。ただ、塊茎部は育ちが悪い。

横への広がりがなく縦長になったり、パチンコ玉の大きさぐらいで成長が止まってしまうものも多い。そのため塊茎部を一定の大きさに生育させるには土壌の作りこみから追肥の仕方など、それなりの知識と経験が必要になる。

葉部と塊茎部のアミノ酸18種の成分分析から、成分総量としては葉部のほうが塊茎部より1.6倍も多いという意外な結果が得られた。日本で売られているマカサプリは塊茎部をパウダー化したものだが、アンデスでは収穫の頃には殆ど葉が無くなるように、塊茎部のみを粉末利用しているとのこと。栽培環境の違いで仕方ないのかもしれないが、せっかく豊富な栄養を有する葉部に目を付けないのはもったいない気もする。逆に国産マカの伸長を考えるとこの葉部の利用に大きな可能性があるのかもしれない。



写真4-1 収穫時のマカ



写真4-2 12月のマカ生育状況

栽培時期は日本では晩夏に播種を行い翌年春頃に収穫する。酷暑を嫌う夏場は、避ける必要があるが、酷寒も嫌うようなので外気温を摂氏マイナス5度以上は維持する必要がある。

当然積雪には弱く私自身もそうだがハウス栽培でないとなかなか難しいと思われる。また独特の匂いを持つ植物なので、葉からの蒸散効果でハウス内はかなり匂いが強い。表現が難しいがそれは何かスッパリ感のする香りと言える。

収穫後に生のマカをもとに含有する水分から香り成分の分析を行ってみた。成分の65%がベンジルイソチオシアネート (Benzyl isothiocyanate, C_8H_7NS , 香辛料に含まれる生物活性有機硫黄化合物) という結果を得た。ネットのサプリメント辞典によれば、この成分は、①精力アップ ②不妊症や更年期障害 ③冷え、月経不順、肌荒れ に効果が期待できるとのことであった。これらはマカの効能として一般に言われていることと一致しており、このベンジルイソチオシアネートが薬効成分の基なのだと理解できた。

新たなマカの可能性

これまでのマカ栽培の経験から次の展開は、やはり国産ならではの強みとしてマカの葉の成分の有効性を活用できないかと考えている。葉の成長を見ると播種から3か月で十分な大きさとなり、さらには古い葉の上に新葉が次々と生えてくる。マカの有効成分であるベンジルイソチオシアネートが葉部で生成されていることを考えると、ある時点で下葉から収穫を始め、その後一か月ぐらいに次の下葉、さらに次の下葉と春先までに4回ぐらいの収穫が可能となる。農業としてのマカ栽培を考えると、これは大きな利点ではないかと思う。



写真4-3 1月のマカ収穫状況

そんな思いで本年1月からマカの葉の収穫を始めた。中心葉を残しつつ周辺葉一本一本を手でむしり取るという結構面倒な作業になったが、ほぼ予定通り葉の収穫を行うことができた。2月にまた次の収穫を行う予定であるが、果たしてどこまで新葉が成長するか期待通りの成長を願っている。

1月に収穫したマカ葉は収穫後すぐに加工処理を行い、マカ葉パウダーのカプセルとして試作品を完成した。水素加工処理を施すことで抗酸化力もアップし、遠赤外線乾燥で素材の持つ成分を極力保持させている。一日に1カプセル服用しただけでも十分に機能して、体の中心からマカのチカラを感じさせてくれる。アンデスのマカの不思議な力は、まさに生命力の源として、すべての人が強く、美しく、生きていくためのチカラになるはずで、老若男女を問わず、多くの人に受け入れられるよう、早く商品

化まで漕ぎつきたいと願っている。



写真4-4 マカパウダー試作品



写真4-5 ザインフラワー店のマカ苗

家庭菜園としてのマカライフ

これまでマカの国産栽培の可能性を追求してきたが、さらには家庭菜園としてのマカの可能性もお伝えしておきたい。葉部に限って言えば十分に栽培可能と思う。もし自宅のベランダでマカ栽培ができれば、天日干し等でのパウダー化はもちろん青果としてのマカが楽しめる。ただマカ葉の生体水分内に含まれる有効成分は、乾燥工程でその多くを大気中に放出しまうため、せっかくの有効成分がもったいないと感じていたが、サラダとか天ぷらとか極力生に近い状態で摂取するなら捨てていた有効成分も吸収でき格段に効率が良い。ほんの少量、一日一本の葉で十分過ぎるくらいである。マカ葉は最盛期になると一株で20～30本近く茂るので一日一本でも一か月近くは楽しめる。新葉の生え変わりも考えると、きちんと液肥を与え続けることで数か月は十分に楽しめるのではないかと思う。

さらに究極的な試みとしてマカ有効成分の呼吸

からの摂取も考えらえる。植物は土壌から吸い取った水分を葉から気体として蒸散している。この気体の香り成分であるベンジルイソチオシアネートを、例えば夜はマカを鉢ごと室内に置くことで室内に香り成分を閉じ込めることも可能となる。



写真4-6 自宅ベランダのマカ鉢

香りについては個人の好き嫌いもあるが、呼吸によるマカ有効成分の摂取は手間も掛からず、長期間の効果も期待できる。自宅でマカ栽培を楽しみながら健康長寿を目指す、そんなマカライフのアピールのため、東京・羽村のザインフラワーさんにマカ苗を置かせて頂いている。アンデスのマカ不思議から日本のマカ不思議へ、そんなマカライフが日本で普及すれば面白いのではないかと期待している。

参考；

サプリメント辞典(http://www.b-webx.net/sapri/he_16.html)からの引用

ベンジルイソチオシアネートとは、南米ペルーの高地地帯（4000m級）で栽培されているアブラナ科の根菜類で、マカの有効な辛味成分である。（英：benzyl isothiocyanate）

ベンジルイソチオシアネートは、タンパク質、アミノ酸、ミネラル（鉄や亜鉛など）、ビタミンなどの豊富な栄養素の他に、アルカロイド、アントシアニン、サポニンなどといった機能性成分も含まれている。

強い滋養強壮作用や持久力の強化、男性の精力アップ効果、また、女性ホルモンのバランスの乱れからくる不妊症や更年期障害、冷え、生理不順、肌荒れなどを改善する効果もあるといわれている。

また、男性の精力アップ効果に関しては、健康な男性に対しては有効性が確認されており、天然のバイアグラなどともいわれる。（終わり）

5. じゃがいもの旅の物語（連載 24 号）

旅行作家

杉田 房子

しかし、それはポルトガル人を新たな欲望に駆り立てた。長いこと夢物語で、あのコロンブスでさえ探しあぐねたキタイやジパングは、本当に東方に横たわっている。その間には、ここまであふれてくるほどの絹や香料や黄金があるのだ———。

1503年、ポルトガル人はホルムズを攻略した。王宮に乱入した兵士は金銀、宝石、絹などを奪った。

「四人がかりでも動かせない絨毯を切り取ろうとした兵もいた」とバロスは記録している。「四大港の取引」は止まったが、ポルトガル人が去ると、また取引がはじまった。ピレスが見たのは「取引が成り立っている」世界の活力そのものだったのである。

しかし、その後にゴアを手中にしたポルトガル人は、1513年、再びホルムズを攻略した。四大港のうちアデン、ホルムズ、ゴアの三港が昔と変わってしまつては、さすがの取引もう成り立たない。

小麦のパンから水々しいザクロまであふれていたホルムズ島は、次第にさびれていく。賑やかだった町は砂塵に埋もれ、船がいっぱいだった港は、潮と風に崩れて行いった。

アラビア海に面したインド南端のマラバル地方は、1506年1月13日の午後1時から32時半まで、太陽が欠ける日蝕を見た。翌1507年7月15日、同じ地方が地震に見舞われ、ひどい時には1時間に数回も激震に襲われた。

「やっぱり天変地異がやってきた」

インド人は、日焼けした浅黒い顔を青くして噂しあった。『やっぱり』とは、ポルトガル人が現れて万事が変わってきた嘆きだが、その変化もいよいよ破滅に近いという恐れが「とうとう」だった。

1498年から1502年にかけて、ポルトガル人が初めてこの付近に登場した時、インド人は気にもかけなかった。白い肌なら、アラビア人にもペルシャ人に

も大勢いる。それが西からくる人間なら、東からはベンガラ（ベンガル）、マライオ（マレー）、シナム（タイ）、キタイ（中国）——。ポルトガル人は「四大港の取引」に新顔が加わったぐらいにしか思われない。

しかし、その新顔がマラバル南部のコシに城を築き、近くのカレクト国王が1503年から2年越しに攻めたのに、びくともしなかったとなると話は違ってくる。1510年、マラバル北部のゴアを占領し、堅固な要塞にしてしまうと、インドのアラビア海岸全体がもはやポルトガル人抜きではなにもできなくなった。ポルトガル船隊の指揮官アルブケルケは、こう記録している。

「わが船隊が海を支配するまで、イスラム教徒もインディアも、誰にも妨げられず取引に往来していた。が、いまではびくびく航海している。インディアとアラビアの間を直行する船はなくなって、アデンに寄る、そこでわが船隊の目を盗んでやってきた船同士が取引し、再び東西南北へひそかに散っていくのだ。」

アデン攻略に失敗したアルブケルケは、そこで再攻撃の必要を力説するのだが、それは取引のすべてを支配したいポルトガル人の野望を物語ってもいた。

ポルトガル人に占領されるまで、ゴアは運ばれてくるアラビア馬の取引だけでも、賑わう、豊かな港町だった。ゴア国王に一頭当たり10パーセントか15パーセントの税を払えば、誰でも馬の売買ができるので、安くて良い馬が1年に数千頭も取引され、遠く中国からさえ買付け人がやってきた。その上、市場では、織物、香料、薬剤、貴金属が取引され、米、麦、野菜の食料もあふれている。

ポルトガル人は、その豊かさをすべて吸い上げてしまった。マヌエラ金貨、エスフェラ銀貨、レアル銅貨を鑄造して取引に使わせ、一銭でも見逃そうとしない。

日蝕、地震という天変地異は、「世界は四大港の取引で成り立つ」と思っていた人々に『やっぱり』

にしる『とうとう』にしる、いままでと違う世界の到来を告げていたのかもしれないのである。

じゃがいもが、アフリカ東岸を離れてたどり着いたのは、それまでとは違う世界がインドに開幕した直後だった。

じゃがいもが、生まれ故郷の南米アンデス山地を下ってヨーロッパに向かったのが1533年以降だから、インドのマラバル地方を揺るがした天変地異を知るわけもないが、大西洋につづいてインド洋の波濤も越えたインカの人々の食べ物は、亜大陸と呼ばれる広大なインドの半世紀後の食生活にも大きな変化をもたらしている。

1506年頃のマラバルの主食は、バロスの記録では多彩な香辛料の味付けを別とすると、小麦とそのパン、米、ナツメなどだった。ピレスが1511年頃に記録している主食も似たようなものである。ところが1583年から4年半もマラバルに住んだオランダ人リンスホーテンの記録には、主食としてトウモロコシとサツマイモが登場する。

「イニヤーモとバタタは、地中に多生する。黒人奴隷の主食だが、インド人もポタージュスープにしたり、ゆでて肉に添えたりして食べる。とくに揚げたバタタは、食事の最後の皿として喜ばれた」

イニヤーモはヤムイモのポルトガル語だが、バタタのサツマイモはスペイン語と同じである。コロンブスが、新大陸発見の初期にカリブ海の島からもたらしたサツマイモが、この時期に、もうインドの土に根付いていたのにも驚かされるが、リンスホーテンの記録はさらに驚くべき事実を告げる。

「トウモロコシは、米や小麦の穀類同様に、ゴアより南部のマラバル地方でよく栽培されている」

（つづく）

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

- ① 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9 100años
de historia de la inmigración japonesa
en Bolivia を原典として 2012 年までを追補
在庫多数
- ② 『大地に生きる沖縄移民』 2005-12 コロニア・オナ
入植 50 周年記念誌、在庫 1 冊
- ③ 『ラパス日本人会 90 年の記録 1922-2012』
2012-10 在庫 2 冊
- ④ 『ボリビアを知るための 73 章』 (第 2 版) 2013
・ 2 明石書店刊行
上記は、①-③とも統一価格 2500 円、④は
2000 円 (いずれも税・送料込)
ご注文は下記の当協会までメール又は電話でお
名前、ご住所、電話番号、書籍名、冊数を
ご連絡ください

admin@nipponbolivia.org 042-673-3133

お支払は振込でお願い致します (口座番号・
名義人は発送時ご連絡致します)

協会関係活動の近況

- 12・8 DIFAR (会員) 東京報告会 (高田馬場)
杉浦専務理事参加
- 12・15 キヌアカフェ(キヌア協会主催) (西麻
布 LA サロン) 杉浦他会員 3 名参加
- 12・26 WAYRA Japonandes 東京公演 (実行委員
会主催) (新大久保:淀橋教会)
椿会長他役員 5 名、会員 6 名 同伴者 9 名、
合計 20 名参加

- 1・30 Feria de Aracita (在日ボリビア大使館主催)
(市ヶ谷・セルバンテス協会)
椿会長他会員 5 名参加
- 2・5 LA 協会 新春懇談会 (LA 協会主催) (東京
会館) 杉浦専務理事参加
- 3・9 ボリビア料理と BBQ の集い (ボリビア協会
主催) (台場・ダイバシティ東京)

編集後記

カントウータ 35 号をお届けいたします。

この号では、本年 10 月のエボ・モラレス大統領 4 選
を廻るボリビア政治・経済の緊迫した状況をサンタ
クルス在住の実業家・島袋正克氏に、次いで、ボリ
ビアのオキナワ移住地出身の在日日系人と、日本の
中堅建材メーカーとの協同によるボリビアへの建材
輸出の取組について、支援協力者の小林正博氏に、
さらに、フォルクローレ成立の歴史をボリビア音楽
の研究者兼演奏家の牧野翔氏に、最後にボリビア特
産の滋養強壮サブリ原料の植物・マカについて日本
での栽培家・川上裕二氏に それぞれ寄稿して頂き
ました。

4 名の寄稿者の皆様には厚く御礼申し上げます。

桜前線も徐々に北上しつつあるようです。

皆様のご健勝とご活躍をお祈り致します。

編集委員 椿 秀洋 杉浦 篤 細萱恵子

Copyright© 2002-2018

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)